

極微 ごくみ

おらが蕎麦

三十年ぶりに、信州戸隠に行つた。初秋というのに、気温は十三度。吐く息が白い。戸隠神社は、山岳信仰の霊場で、比叡山延暦寺の末寺だった。明治維新によって神社に統一されたのである。この門前に小さなそば屋がある。かつて、その香りに驚愕したので、今回楽しみに寄つてみた。往事のひなびた様子は一変し、門市をなすはやかたである。味は書くまい。三十年前と同じ味を求めた方が無理だと痛感した。信州では、月と仏とおらが蕎麦(一茶)。

# 天台ジャーナル

The Tendai Journal

第7号

2003年(平成15年) 10月1日水曜日(毎月1日発行)  
1部50円(送料別)  
発行所/天台宗出版室  
〒520-0113 大津市坂本4-6-2  
天台宗務庁内  
電話 077-579-0022 (代)  
Eメール/T-Press@tendai.or.jp

## 仏道とは

### 正しく生きると見つけた

京都・三十三間堂の本坊である妙法院門跡の第五十一世門主に就任が決まった。早稲田大学名誉教授、文学博士、天台宗勸学と近寄り、たい肩書きだが、話し始めると、いたってざつとくばらんな性格である。栃木県日光市生まれ、日光

輪王寺一山の照尊院住職だが、大学勤めの関係で東京暮らしが長かった。大学紛争華やかな頃は、早稲田大学文学部の教務主任(のちに学部長)だった。全学連との団交で、吊し上げられ、もみくちやにされながらも「できないことは、できない」と突っぱね

る。当時は、五十歳。その時の硬骨漢ぶりは、今の濃厚な風貌からはなかなか想像出来ない。「学生運動が反面教師となつて、一生懸命に勉強する若い人たちが出てきた。その意味では価値があったかもしれない」という根づからの学

窓の人である。妙法院には福井康順師(元大正大学学長)、大久保良順師(同)、そして今回の菅原門主と学問の世界からの就任が続く。「そのことが、研究者の励みとなれば」という言葉の裏には、必ずしも学問を志す人々が恵まれていないという義憤がある。自身も三十五歳までは、身分も、経済も不安定な非常勤講師だった。「長女が、小学校に入学する年に、早稲田の専任講師になつて、やっと生活が安定した。家族には、本当に苦労をかけた」。

の底では天皇家に代わって徳川家が天下を支配するという意味を持たせている。そのような説を発表したのが昭和三十年。終戦後十年経っていましたが、それでも怖かった。「妙法院での活動はどのような展開されるのか。「宗門の発展と教学の振興」ということになります。若い研究者が安心して勉強できる環境を整えたい。また私は、仏者というのは、正しく生

きるということだと思つている。他の人から非難されないよう心がけてゆきたい。日光の自坊・照尊院は寛永十三年の建立になる。東照宮を尊ぶという意味で天台大僧正が命名した。日本で、ただ一つの寺名である。今、この由緒ある寺院を譲り、京都への引越に追われている。「京都は歴史の宝庫だから、研究もしたいのですが、時間があるかどうか。京都の底冷えも心配です」。

インタビューは二面に



住職就任式(晋山式)は11月30日に。

第51世妙法院門跡門主に就任する 菅原 信海 師(77歳)

## 衣の内側に燃える研究心

興味を覚え、調査研究を始めたが、資料はあまりない。神仏習合の宝庫である日光でも、それまで研究した人はいなかった。「戦前は、そんなことを軽々に言えなかった。徳川家康を、天台大僧正は『東照大権現』として日光に祀る。東照大権現という名は、東に照る、すなわち太陽のことだと思つていた。太陽は動いて天の真上に来る、すると天照ということになる。天照大神は天皇家の祖先だから、天海は遠慮して東照とつけてはいるが、腹

「神仏習合」の権威である。日光そのものが、神と仏の同居地である。子どもの頃から、その世界を見て育つた。「一般的に、ひとつの宗教中に、他の宗教が入つてくると、追いつかぬとするのが普通。それは、今の世界を見れば一目瞭然です。しかし日本は神と仏と一緒に信仰されている」。

## 素晴らしき言葉たち

Wonderful Words

「あなたおいしくですか」と聞くと「満なんぼです」と答える。昔の日本では「数え年」で言うておつたのですが(略)まあ、世界の通例というか、西洋の習慣に合わせてそうしてしまつた。ほんと言つと、これは大きな間違いなのです。「大愚のすすめ」

山田惠諦著・大和出版

これは、山田座主が折にふれ、お話になつたことです。満年齢で数えるのは、西洋の考えかたである、それは、向こうは狩猟民族であるから、獲物と命がけて戦つて、自分のものとするまでは確実ではない。だから、人間も生まれて顔を見てから、初めて年齢を数え始めるのである。それに対して、農耕民族である私たちは、妊娠したとき、すなわち芽が出たときから数え始めるのだということ、常々説かれていました。いわば、自然と人間が対立

関係にあつて、戦い取るという西洋の思想に対して、自然の道理になつて、天地自然からあらゆるものを得させて頂いているのだという東洋の考え方です。生まれた時が、零歳なのではない、母の胎内に宿つたときから人間なのだから、その時から数え始めるというのが、自然の摂理なのです。生まれる前ではあつても、芽を出した段階で人間と認められるのです。それは、人間の尊厳を深く意識することでもあります。



健康チエック

七月二十八日の門跡寺住職推薦委員会で、全会一致で推挙されましたのに、受諾されるのに時間がかかりました。

まず、由緒ある妙法院門跡の門主をお受けするのは、なによりも健康が大事だと思っておりますので、ご指名を受けた段階ですぐに健康チエックをいたしました。異常なしとの診断が八月六日でした。この時に、内諾をさせて頂きました。次に、私は、日光輪王寺の一山寺院でありますから、緊急の一山会議を開いて頂き、正式に籍を抜いて妙法院の正住職として就任させて頂くことになったのです。

家族連れで

早稲田大学の名誉教授でいらっしゃる菅原信海師。関西で暮らすのは初めてですか。

いえいえ、生まれは日光ですが、四歳から七歳まで、つまり小学校の一年生までは、比叡山山麓、天台宗の宗務庁がある大津市坂本におりました。父・英信が、昭和四年に天台宗の庶務部長に就任したものですから、連れられて

小学校一年生まで大津坂本に  
日光に帰っていいじめにあった

行つたのです。今は、総長さんも、部長さんも単身赴任ですが、当時は、家族連れでの着任でした。官舎の旧延命院で四年間を過ごしました。小学校一年生の一学期を終えて日光に帰つたのですが、すっかり関西弁になつてしまひまして、日光では、今で言うういじめにあいました。学校の先生にも心配かけました。もともと、言葉は、すぐにもどりましたが。

自分にあつた宗教対立が、世界を揺るがせているテロの根にあるとい

自分にあつた

われていますが。仏教は、伝教大師の説かれた大乘の教えがあります。仏教はインターナショナルで排他性はありません。すべては仏になることができるという教えです。だから一緒にされる、神とも習合できるので。有名な忘己利他という言葉も、私は、自分のことは後回しにして、と読みたいのです。そういう精神が世界に広がるのですが、結局は世界平和への近道だろと思ひます。日本人は忠臣蔵や特攻隊に血が沸くようなところがありますが、あれは仏道とは言え



入山式は9月16日。東京の騒がしさを離れて日光へ帰り、そして又、京都へ。

ませんよ。違いますね。それは、武士道でしょう。ただ、学生にも言うのですが葉隠などに「武士道とは死ぬことと見つけた」という有名な言葉があります。そんなきれいなものじゃありません。もっとドロドロとした情念のようなものなんです。何事も、表面だけかじつてわかつたように思うのはよくないことです。

慈悲とドライ

福井元門主から、学問の研究とは真剣勝負、お互いに槍を構えてぶつかりあうようなもので、負けた方は、馬からドウと落ちるぐらいの激しいものだと聞いたことがあります。仏道と学問研究、二つを並び立たせるのは大変だったのでは。

確かにそうです。衣を着ると競争しようとか、荒い言葉は使えませんし、そんな気にもなりません。しかし学問の世界は、真実を追究するために激しい応酬もあります。誹謗中傷もあります。昨日まで、親友だったのに、ある日を境に、激しいライバルになる。その中で評価を得た者が、生き残るドライな世界です。しかし、一面で学問の世界は自分の選んだ道でもありますから、仏道と研究は割り切るしか仕方ないと思ひました。それにやはり、好きだったのでしよう。今はもうできま

せんが、若い頃は、ひとたび研究に熱中すると夜がしらじらと明けることなんかしょっちゅうでした。

そうすると、研究した問題に解答が出ると、アルキメデスが素っ裸で風呂を飛び出しユーレカ(わかつた)と叫んで、町中を走り回つた心境になるのでしょうか。

まあそれはどうですかね。でも、研究の結果を論文で発表して、反応を待つ、それはワクワクするような気持ちです。学生には、スタンド

プレーはよくない、地道な研究こそ大事だというのが、やはり学会の常識を覆すような研究はやりがいがあるもんです。

また、学会は資料中心ですが、当時の人々が怨霊におびえた、すなわち宗教が果たした役割というものを加味しないと読み解けないことも多いのです。大文字の送り火にしても、御霊会などそうです。

火砕流の三日間

辛いと思われたことは。

私は、例え辛いことがあつても、乗り越えようと思つてます。これは、学問という知的な世界に飛び込んで身につけた習性でしょうか。好奇心で、徹底的に突き詰めよう、

そうして乗り越えようと思ひますね。資料調査の研究費は予算があるんですが、まあとても足りない。お腹を切ることもしばしばです。それに、危険なこともあります。島原に松平文庫の調査に行きましたが、火砕流が迫つて橋を壊している。学生を連れていまして、責任は重大です。たどり着けるかどうかヤキモキしました。結局三日泊まり込んで仕事をしたんですけど、これも、真理を追究しようと思つたから出来たのでしよう。それに学生諸君と、たまには飲まないといけませんね。まあ、これは楽しみですかね。

聞き手・横山 和人  
天台宗出版室編集長

反核。対話を語る

ドイツでの平和の祈り

天台宗国際平和宗教協力協会

九月七日から九日にかけて、世界遺産に登録されているドイツのアーヘン大聖堂で開催された「第十七回世界宗教者平和の祈りの集い」において、平和の祈り開催以来、外国の宗教者から初めて「広島原爆」が取り上げられた。

ノーモア原爆を訴えたのは、前イスラエル首長ラビのイスラエル・メイール・ラオ師である。ラオ師は今

年八月四日に比叡山上で開催された「比叡山宗教サミット十六周年」に来日し、広島での原爆慰霊祭にも出席している。

みや暴力、戦争の愚かさか訴えられた。天台代表団の団長として参加した西郊良光宗務総長は「ドイツでは、仏教の寛容さに共感する人が非常に増えている。仏教者が各宗教間の橋渡しをすべきことを再確認した」と語つた。



アーヘン市街地での平和の行進



ハワイ開教奮戦記 (2)

## なぜハワイへ

荒了寛 (カットも筆者)

ハワイに渡って三十年たった今でも、はじめて会う人には必ずといっていいほど「なぜハワイに行ったのですか」と聞かれます。

「さあ、実際数えきれないほどの縁に導かれて私はハワイに渡ったといえましょう。その中で特に決定的な縁はどれかと言われれば、羽場慈恩大僧正との出会いをまずあげなければなりません。はじめて羽場大僧正から電

話がかかってきた時のことは、今でも昨日のことにように鮮明に浮かんできます。羽場大僧正は、天台宗宗議会議長を務め、のち初代の天台宗海外伝道事業団事務局長に就任されることになりました。海外伝道事業団の創設者であり、大功労者といつてよい方です。

ある日突然、私の勤務先に「ハバという者ですが」と電話がかかってきました。「ハバ」とはどういう字を書くのかと思いつきながら聞いていますと「ハワイのこと、相談したいことがあるので、ちよつと来てくれませんか」とのことでした。

電話の主もさることながら「ハワイに行ってくれ」という言葉も唐突なものですぐには返事しようもなかったのですが、ウムを言わさぬ迫力でした。すべてきめてかかっているような口調に気押されて、私はその日の夕刻、教えられた住所と道順にしたがっ

たいということ、その日は別れました。当時私は、大学院時代からアルバイトをしていた化学薬品会社で開発の仕事をしていました。工場を建てるなど結構大きな仕事をまかされていたので居心地も良く、もうしばらく様子を見てみようというので、大学院を終えてからも仕事を続けていたので、時おりは天台学研究室にも顔を出し、関口眞大先生のお手伝いなどもやっております。岡倉天心記の「天台小止観」を知ったのも先生のおかげでした。

大寺の谷玄昭貫首のご厚意で明静院の境内の一隅に建てさせてもらっていたので、その頃田舎から出てきた者としては、一応恵まれた方だったといえるかもしれません。したがって「ハワイに行かないか」などといわれても心は動かなかった筈ですが、時間がたつほどに前向きに考えるようになったのは、一つはこういう機会に、若い頃全日本仏教青年会創立時代からかかわってきた経験を生かして、国際的な舞台で仏教の可能性を探ってみるのも意義のあることであろうと思っただけです。

もう一つは、障害をもって生まれた私の息子のことで、

## 夜と霧

天台宗宗務総長 西郊 良光

世界宗教者平和の祈りの集いがドイツのアーヘンで開かれた。

アーヘンはベルギー国境に近い美しい街である。

祈りに参加しながら、私は、昨年比叡山の「イスラムとの対話集会」でユダヤ教のアルバート・フリードランダー師が演説された内容を思い出した。

フリードランダー師は、フランクルという精神科医に言及された。フランクルとは、奇跡的にアウシュビッツから生還したヴィクトール・フランクル医師のことである。フランクル医師は、その体験を「夜と霧」という著作に記した。個人の視点から語られるアウシュビッツの現実、事実が淡々と記されている分、いつそう鬼気迫るものがある。それは、人間がいかに残酷になれるかという記録

でもある。夜と霧とは、夜の闇に乗り、霧にまぎれて人々がいくこともなく連れ去られたことに由来する。昨年新訳が出た。訳者の池田香代子さんは言う。「受難の民は度を超して攻撃的になることがあるという。それを地でいくのが、二十世紀初頭のイスラエルであるような気がしてならない。フランクルの世代が断ち切ろうとして果たせなかった悪の連鎖に終わりをもたらず叡智が、今、私たちに求められている」。

今、世界はイスラエルばかりではなく、多くの国が自らを「受難の民」と感じているような気がする。報復に次ぐ報復という悪の連鎖を断ち切る叡智を求めて、祈り、行動したい。

私はいよいよ戸惑いを感じながらも「なぜ私なのですか。私の名をどうして知ったのですか」と聞くと、「先日、幼稚園関係のグループでハワイに視察旅行に行った時、錦戸眞観先生の知り合いで末村さんという人に会った。あなたのことは末村さんから詳しく聞いた。帰ってすぐ大正大学であんたの勤務先を教えてもらい電話をした」ということでした。

話に出た末村武雄氏とは、ハワイでは明珍昭氏の仏像等を扱っていた人です。明珍氏は、東京芸大の彫刻科を出て、新技術による仏像の複製や販売を行なっている明古堂の社長でした。私は末村氏が日本に来る度に、明珍社長に同行して何度か会っていました。

明珍氏は仏像彫刻家の錦戸先生との関係も深く、その縁で末村氏ともお付き合いがあったようです。

こうしてめぐりあって、私の名が羽場大僧正に伝わり、こういう男なら海外でも何とかつとまるだろうと、私に会ってみる気になったものらしいのです。ともかく、私の一生にかかわることであり、即答できるようなことではないので、数日考えさせて頂き

## ハワイなら息子の命も

て、羽場大僧正の自坊、嶺照院を訪ねました。

羽場大僧正の話はまことに単刀直入で「天台宗の開教師としてハワイに行ってくれないか。天台宗もこれからは国際感覚をもった僧侶を育てなければならぬ。ハワイに寺を建て、海外開教の拠点にしたい。初代住職としてハワイに行ってもらいたい」というものでした。

た。八年ぶりで生まれた子でしたが、生まれた時、担当の医師から「この子は十歳位まで生きられればいい方です。暑さ寒さに気をつけて下さい」と言われました。しばらくは夫婦で暗闇を歩く思いでしたが「よし、息子の城を建てよう」と、障害をもった子どものための施設をつくるという夢のような計画をもっておりました。

しかし、当時の日本は社会も行政も冷たく、容易なことでは施設など作れるものではないと分かってきました。そんな折に、ハワイの話がとびこんできたので「ハワイなら息子ももう少し生きることができるかもしれない」という気持ちになったのはごく自然なことでした。

隣に住んでおられた谷師とも相談し、前向きに取り組んでみようということになり、その旨羽場大僧正に伝えました。寛永寺の杉谷義周大僧正にも報告し、了解を頂いた上で回答したいということも申し添えました。

杉谷大僧正は、私の祖父、故荒眞了大僧正と兄弟弟子で、荒大僧正が寛永寺の住職をしていた頃から、私も個人的に何かとお世話になっておりました。そういった事情を羽場大僧正も納得され、寛永寺にも同行して頂き、羽場大僧正からこれまでの経緯や今後の事情などを説明申し上げ、杉谷大僧正の同意を頂くことができました。この「大物」同士の合意をきっかけに、天台宗ハワイ開教事業は大きく進展をみせることになったのです。

## 鬼手仏心



# 小石に祈りの言葉を描く

## 仲良く歩こう一緒に生きよう

河原で拾った石に、仏を描き、言葉をします。

「ことば石」と名づけた作業を続けるのは、長野県に住むさとうとともに（佐藤友二）さんである。「石にもいのちがある。人間の僕のほうが石に励まされている」という。そんなさとうさんの言葉に惹きつけられる人々が増えていくと聞いた。独習したオカリナのコンサートも年に八十回から九十回を数える。依頼は増える一方だ。「楽譜も読めない僕だから、安心して聞けるんじゃないですか」。風の中を、漂うように流れてゆく素朴な音には、オーケストラにはない安心感がある。

さとうさんの作品展やコンサートには子育てを終えた女性や、働きづめに働いてきて「自分探し」をしている人が多い。

さとうさんは、小学校三年生で母を亡くした。そのことが原因となってコンプレックスが強く、自信の持てない人生を過ごしてきた。

石に、自分の心から書き出る言葉を書いてみようと思ったのは、十六年前のことだ。その時に、近所の百々川を

歩いていて、中州にある小石に目がとまった。普段は石のことなど考えもしなかったのに不思議だった。

百々川の上流には廃鉱があつて、川の水は赤茶けた酸性水である。飲むことはできない。いわば役立たずの川に転がっている石をひっくり返してみようと、河川の所々に生えているアシの真っ白い根がこびりついていて、育ちにくい環境でなんとか生命を維持しているアシたちが流されていかなないように、石たちは押さえる役目をしているのだ。

「こんな石ころたちにも役目があるんだ」と思い、次々と石をひっくり返してみたら、そのどれもに、植物の根が

「その時に石が、おまえもそうだよ、役目があるんだよ」と語りかけてきたように思った。衝撃だった。

何個か石を拾って帰り、奥さんに見せると「それは、いいことを、言われたね」と言

## 石の声を聞け

これまで、コンプレックスから自分の内面を放り出すような生き方はできなかった。それが祈り仏を描き、言葉を書くことでさらけ出すことが出来た。

「あわてなさんな、いそぎなさんな、今ふる雨は通り雨」。

「自分でも、出てきた言葉に自分自身でびっくりするところがあるんです。これは亡くなった両親が、語りかけてくれているんじゃないかという気になります。その元をたどれば、仏様ということになりますか」。

さとうさんの言葉を見て泣き出したり、興奮したりする人もあるという。

「人を救おうとか、感動させようとか、そんな気持ちでやっていると、それはいい。もとは、自分が救われたいと願い、人生への贖罪というか懺悔の気持ちで始めたことです。それが結果として人々に受け入れられているのだと思う」。

必要なものは、全部自然界にあるという生き方である。「若葉は風に吹かれれば、太陽に表も裏も見せて輝く。人間も、良いところだけ見せようとせずに、悪いところも見れば輝くの」。

さとうさんの吹くオカリナ

わかれた。この奥さんの一言がきっかけになって、石に自分の言葉を書いてみるようになったのだという。趣味で書道はしていたが、石に書くなんて思いもしなかった。不思議と心が落ち着いてきた。

は、風にただよう独特の音色である。ミュージシャンではないのに、各地のイベントではひっぱりだこである。大阪城ホールでは二万人を前に演奏した。「一度聞いた人が、また来てくれる。こんな私の演奏を聞いてくれるリピーターにはただ感謝です」。

「岩笛」を聞かせてもらった。聞き慣れない楽器だが、自然に穴が空いた石を、笛として吹くのだという。構造はシンプルだが、音を出すのは単純ではない。「縄文時代からあつた楽器です。神事や祈りの時に吹いたものだとされています」。さとうさんが吹くと、ピーという高い音が鳴る。石が何かを願って、静かに叫んでいるようにも聞こえた。



## 幸せは気付いてみたら今がそう



石に書いた般若心経

総本山延暦寺御用達  
墓地・墓石・供養塔・石佛・灯笼・無縁改葬

かわ なみ

京の石匠 **河波忠兵衛** 七代目

京都店・京都市伏見区醍醐鍵尾町11-2 TEL 075-572-8888  
大阪店・大阪府高槻市紅茸町2-8 TEL 072-688-1489

最新刊

**天台ウーマン という生き方**

おんなたちのスローライフ  
横山和人 定価 一三〇〇円十税  
宗門人必読の書

「天台に生きる女性たち」十三人のオンリーワンの難きをさらりと描き出して話題を呼んだ『比叡山時報』の好評連載が本になった。新しい天台時代の幕開けを予感させる一冊。

好評既刊

**葬式仏教は死なない**

青年僧が描くニューソウディズム  
ひろさちや 井上治代 高橋貞志  
藤田庄市 全日本仏教青年会  
定価 一八〇〇円十税

二〇〇三年京都で開かれた葬式仏教をめぐるシンポジウムで、ひろさちや氏が繰り広げたトーク・バトルを再現し、青年僧の新たな活動を伝える。シンポに際して初めに行われた青年僧へのアンケート調査の分析を初公表。貴重な資料として注目されている。

図書出版 **白馬社**  
〒612-8105  
京都市伏見区東奉行町1-13  
TEL 075(611)7855  
FAX 075(611)7852